

# 琉球大学学術リポジトリ

## The Altrurian Romances における William Dean Howells の社会正義の訴え

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部国際言語文化学科欧米系 公開日: 2008-10-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 赤嶺, 健治 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/7510">http://hdl.handle.net/20.500.12000/7510</a>

## *The Altrurian Romances* における William Dean Howells の社会正義の訴え

赤嶺 健治

### I

Walter Fuller Taylor は、その著 *The Economic Novel in America* (1942) において、William Dean Howells (1837-1920) の経済小説として、*The Minister's Charge* (1887)、*Annie Kilburn* (1889)、*A Hazard of New Fortunes* (1890)、*The Quality of Mercy* (1892)、*The World of Chance* (1893)、*A Traveller from Altruria* (1894)、および *Through the Eye of the Needle* (1907) の7編を取り上げ、明解な分析を行っている (243-46)。最後の2編は、内容的に連続したユートピア物語で、別途雑誌に掲載された11通の "The Letters of an Altrurian Traveller" (1893-94) のうち、この2編に織り込まれなかった5通と共に *The Altrurian Romances* (『アルトルーリア物語』) として1968年に出版されたものである。Taylorによれば、これらの経済小説及びユートピア物語群で Howells は、完全な国家の必要条件として、経済的自由・平等・博愛、そして特に経済的保証を挙げ、経済的自由・平等の無いところに政治的自由・平等は有り得ないと説いている。例えば、被雇用者が、憲法で保証された投票権を行使するに当たって、解雇や減給を恐れるあまり雇用者の言いなりにならざるを得ない立場に置かれていては、個人の自由意思を確実に政治に反映させることはできないと述べている。つまり、自由は、生計手段の確保されている人 (すなわち経済的に平等の立場にある人) のみが享受できる権利であり、経済的平等は、その他諸々の平等の前提条件である、と Howells は考えたのである (249-51)。

Howells の描くユートピア Altruria は、エーゲ海に浮かぶ共和国で、キリストの死後成立した最初のキリスト教原始共同体の一員によってもたらされたキリスト教文明の国である。Altruria は、貨幣を諸悪の根源として廃止し、すべての国民が人に頼ってではなく、人の為に生きる altruism (利他主義ま

たは愛他主義)の国で、神の王国を地上で実現させた「地上の天国」と見られている。Howells は、この Altruria の現状と、南北戦争後の「金びか時代」に急速に発展した産業と機械文明の社会で、物質万能主義と拝金主義がはびこる現状とを比較対照させながら、アメリカとアメリカ人に対して挑発的な風刺と鋭い攻撃を加えることにより、アメリカにおける社会正義の確立を訴え、その確実な浸透を要求している。

本論考のテーマに掲げた「社会正義」(social justice)は、基本的に、アメリカ建国の理念であり、全てのアメリカ国民の共通の価値基準といえる「平等、生命、自由、幸福追求」の諸権利に根差すものである、と言えるものである。『ウェブスター大辞典第3版』は、"social justice"を"a state or doctrine of egalitarianism" (平等主義の状態または原則)と定義している。同辞典の"egalitarianism"の定義を要約すると、「平等主義」とは、「すべての人間が本質的な価値において、また生来、素質や才能において平等であり、社会の諸権利と恩恵を等しく享受する資格を有しているという信念、特に、社会的・政治的・経済的不平等の是正を主張する社会思想」ということになる。つまり、「平等」には、「社会・政治・経済」の三面における平等が包含されているのである。『総合研究アメリカ④平等と正義』では、「社会正義」を考える上で重要な三つの要請として、「自由・平等・社会経済的福祉の増進」が挙げられている(川又 383)。つまり、社会正義の要求は、アメリカ建国の理念に根差す当然のものであり、その達成と確立はアメリカ国民の共通の目標である、と言える。

本論考では、以上のことを踏まえて、Howells がユートピア物語で、社会正義達成の手段として提示している諸方策を解明し、それらの現代における有用性および有効性について検証していきたい。

## II

まず、*The Altrurian Romances* (『アルトルーリア物語』)の構成と物語のあらましについて見ておきたい。

第一編は、*A Traveller from Altruria* (1894) (『アルトルーリアからの旅

人』)として、1892年11月から翌年10月まで、合計12回にわたって *Cosmopolitan Magazine* に連載されたものである。ギリシャ文明とキリスト教に根差す Altruria 共和国の使節である Aristides Homos (35歳) が、1892年にアメリカを訪れる。彼は小説家 Twelvemough の案内で、New Hampshire 州、New York 市、Chicago 市を視察し、アメリカの現状とアメリカ人の価値観などについて自国の現状と対比させながら論評する。この作品は、Homos の言動を同行の Twelvemough が書き記した形になっている。

第二編は、"Letters of an Altrurian Traveller" (「アルトルーリアからの旅人の手紙」)として、第一編に引き続き、1893年11月から翌年9月まで、同じく *Cosmopolitan Magazine* に掲載された11通の手紙のうちの第1～第5の手紙を収めている。アメリカに1年以上滞在している Homos が、1893年9月1日から11月15日までに故国 Altruria の友人 Cyril Chrysostom に書き送る手紙の形になっている。手紙の発信地は New York 市と Chicago 市で、特に当時コロンブスのアメリカ発見400周年記念にシカゴで開催されていた万国コロンビア博覧会(会期1893年5月1日～10月30日)を、Altruria をモデルにしたようなものである、と賞賛した手紙が目される。

第三編の *Through the Eye of the Needle* (1907) (『針の穴を通して』)は、第1部が "Letters of an Altrurian Traveller" の第6～第11の手紙を再録したもので、第2部は書き下ろしである。第1部は1893年11月9日から翌年4月20日までに Altruria 在住の友人 Cyril に送った手紙の形で、第二編の続編である。第2部は、Homos と結婚して Altruria に移住したアメリカ人女性 Eveleth Strange からアメリカの友人 Dorothea Makely に宛てた手紙の形になっている。金持ちの未亡人である Eveleth は、当初アメリカにある財産を手放すのを惜しんだが、Homos に惚れて交際を重ねて行く内に、"Altrurianism" に「改宗」して結婚し、Altruria に渡った後、富の重荷と恐怖から解放された至福の生活を送る。Eveleth は、アメリカにいる友人への手紙で、Altruria がこの世に実在することを証明する生き証人の役目を果たしている。

Altruria からの旅人 Homos が案内役の小説家 Twelvemough と共に会合して意見交換をする相手は、New Hampshire 州の山中にあるリゾートホテルで

夏を過ごしている銀行家、政治経済学教授、牧師、弁護士、医師、製造業者らから成るグループで、アメリカ社会の各界を代表する人々である。Twelvemough 自身が語るように、このグループは、まさしくアメリカ社会の縮図 (a sort of microcosm of the American republic) (28)と見ることができ、彼等が述べる見解が、アメリカ社会の中流階級の上層に属する人々のコンセンサスを表す仕組みになっている。Homos によれば、「独立宣言書」の掲げる崇高な理念にもかかわらず、アメリカは階級社会となり、職業に貴賤があり、召し使いの仕事などが卑しい仕事とされている。また成功者は社会の弱者に対して何ら義務感を持たないことを不思議がる。Homos が、Altruria では「すべての人が義務と権利の面で平等である」と述べるのに対し、Twelvemough は、アメリカでは「すべての人が機会において平等である」と言い返す。つまり、Altruria の平等が「結果の平等」を保証するものであるのに対し、アメリカのそれは「機会の平等」すなわち出発点における平等にとどまるものであり、個人主義の行き過ぎによる自然淘汰の要素を認めている。このように、Homos がアメリカについて述べる感想や、彼のアメリカ人グループとの質疑応答は、そのまま作者ハウエルズの当時のアメリカに対する辛辣な風刺であり、激しい抗議となっていて、手法的に効果を上げている。

### III

*A Traveller from Altruria* の第 XI 章で、Homos は500人以上の地元農民を前にして講演をするが、その中で、Altruria 成立の歴史と現状について詳細に語る。年代は明確にされていないが、Altruria では10世紀ほど前に、「蓄積の時代」(the Accumulation)の行き詰まりを打開するため、一滴の血も流すことなく、住民投票により、「進化」(the Evolution)を受け入れ、その名のとおり博愛精神に満ちた共和国 (the Commonwealth of Altruria) を建国したのである。Homos が友人の Cyril に、"America is like a belated Altruria, tardily repeating in the nineteenth century the errors which we committed in the tenth" (175) と述べていることから、Altruria 成立の時期は10世紀頃と推測できる。The Accumulation は、富の獲得と蓄積を

目的とする産業資本主義を意味し、the Evolution は、産業資本主義の弊害を無くし、社会や社会形態・制度などを理想的な姿に発展させた改革を意味するものである。

講演の冒頭で、Homos が "the Utopian dream of brotherly equality" (165) の実現を可能にした改革より以前の Altruria の状況について長々と話していくと、聴衆から「アメリカのことは知っているから、早くアルトルーリアのことを話してくれ」(150) とやじが飛ぶほど、改革以前の Altruria が19世紀当時のアメリカと同様の状況を呈していたことが分かる。それは、"a state where some were rich and some poor, some taught and some untaught, some high and some low, and the hardest toil often failed to supply a sufficiency of the food which luxury wasted in its riots" (165) という、貧富の差が歴然とした階級社会であり、不平等の国であった。この作品で、Howells は Homos の口を借りて当時のアメリカを批判し、自らの信念を吐露していることは明らかである。Howells の信念は、アメリカ建国の理念に基づくものであり、社会正義の実現を主眼とするものである。その源泉は、"the classical-Christian tradition of the Declaration of Independence and the Constitution" であり、南北戦争前にその伝統の中で生まれ育った Howells は、アメリカがその伝統を取り戻すことを望んでいたのである (Kirk xxii)。

Homos にとって理解できないのは、アメリカの政治理念と経済理念の乖離である。彼はアメリカを完全な民主主義国と考えたいが、そのアメリカが理論的にも実際的にもヨーロッパの貴族国家とさほど変わらない点に疑問を持つのである。彼は Twelvemough と浅薄な社交家の Mrs. Makely に「あなたがたの望む経済効果は、克服できない不平等を作り、あなたがたの国が主張する博愛の希望を禁ずることですか？」と迫る (59)。Homos は、友人の Cyril 宛の手紙で、次のように同様のことを伝える。

... logically, the Americans should be what the Altrurians are, since their polity embodies our belief that all men are born equal, with the right to life, liberty, and the pursuit of

happiness; but that illogically they are what the Europeans are, since they still cling to the economical ideals of Europe, and hold that men are born socially unequal, and deny them the liberty and happiness which can come from equality alone. (291)

Homos の言う "equality" とは、「社会的・政治的・経済的平等」のことである。それは、Homos が Cyril に語る次のことから明らかである。

. . . without economic equality there can be no social equality, and, finally, there can be no political equality; for money corrupts the franchise, the legislature and the judiciary here, just as it used to do with us in the old days before the Evolution. (235)

Homos は、Altruria ではすでに恒久平和、不足のない経済、政治的・社会的野心の追放、貨幣の廃止、偶然の排除、博愛精神の普及、死の恐怖の克服などが達成されたとして次のように述べる。

What we have already accomplished is to have given a whole continent perpetual peace; to have founded an economy in which there is no possibility of want; to have killed out political and social ambition; to have disused money and eliminated chance; to have realized the brotherhood of the race, and to have outlived the fear of death. (175)

Altruria ではすべての国民が一日 3 時間の労働義務を果たせば、必要十分な衣食住が支給されるので、生活の不安が無い。義務労働は、「顔に汗を流して糧を得」ること（創世記 3.19）（49）と、「働きたくない者は食べるな」（テサロニケ人への手紙・3.10）（381）という神の掟に忠実に従ったものである。Altruria に漂着した New York の富豪 Thrall の妻に、Homos の友人の Cyril は、"Mr. Thrall's credit is no good in Altruria; you can pay here only in one currency, in the sweat of your faces"（423）と語り、Altruria では、資本主義社会でのように、「金にものをいわせる」ことが不可能である

ことを納得させる。貨幣をあらゆる罪と不幸の根源とみなし、その使用をやめ、私有財産制を廃止し、すべての国民が平等な生活を営んでいるため、犯罪も発生しない。人の死については、Altruria の人々は靈魂の不滅を固く信じている。Altruria 自体が「地上の天国」であり、いわば日常生活の中にキリストが復活している訳であるし、死者も Altruria 以上に良い場所は無いから、必ず復活して戻ってくると信じていることから、死を恐れる理由が無くなっているのである。

#### IV

以上見たように、「蓄積の時代」を覆して「改革の時代」を迎え、「地上の天国」を実現させた Altruria について重要なことは、Homos が "The Altrurian civilization is the outgrowth of the neighborly instinct. In fact, neighborliness is the essence of Altrurianism" と友人 Cyril に語るとおり、国民全体の間博愛精神が浸透していることである (106)。Homos の妻となって Altruria に移住してきた Eveleth が Altruria に漂着した New York の富豪 Thrall の娘夫婦の召し使いの Robert に、"Don't you think it is beautiful here, to see people living *for* each other instead of living *on* each other, and the whole nation like one family and the country a paradise?" (439) と尋ねる言葉から、Altruria では Howells が社会正義の実現のために不可欠と考えた "liberty, equality, fraternity" (「自由、平等、博愛」) が達成されていることが分かる。Howells は、『アルトルーリア物語』を通じて、アメリカ人に、アメリカ社会の改革のための具体的なモデルを示し、その方向への改革が十分可能であることを訴えているのである (Mielke 176)。フランス革命のスローガンともなった「自由、平等、博愛」は、Howells のユートピア思想の根幹を成すものである。(『広辞苑』によれば、「博愛」とは、「ひろく平等に愛すること」であり、「博愛主義」とは、「個人的利己心、人種的偏見、国家的利益、宗教的またはイデオロギー的党派性を捨てて人類全体の福祉増進のために全人類すべて平等に相愛すべきものであるとする主義」のことである)。



『アルトルーリア物語』の大半を占める第一編、第二編、及び第三編の第1部を公刊してから間もない1895年から1896年にかけて Howells は "liberty, equality and fraternity" について三編の論文を執筆し、雑誌の読者に向けて、彼自身が「すごく力強い」(terribly dynamic)と自負する持論を展開した (Howells, *Selected Letters* 127)。"The Nature of Liberty" (1895) が *Forum* 誌に、"Equality as the Basis of Good Society" (1895) と "Fraternity" に関する "Who Are Our Brethren?" (1896) が *Century* 誌にそれぞれ掲載された。「痛烈 (incisive)」(Howells, *Selected Letters* 91) かつ「過激な (radical)」(Mielke 182) と評されるこれら三位一体的な論文は、『アルトルーリア物語』で Howells が Homos をスポークスマンとして展開した社会改革思想をさらに自分自身の実名で堂々と主張したものである。

"The Nature of Liberty" の中で Howells は、「現代生活の中で民主主義が機能するためには、政治面の自由だけでなく、経済面の自由も不可欠である」と述べている (Cady 153)。Altruria の Homos も Cyril に、". . . in conditions where one man depends upon another man for the chance of earning his bread, there can be no more liberty than there is equality" (195) と同様のことを話している。"Equality as the Basis of Good Society" で、"economic equality is the mother of all other equalities" と断言し、"economic equality" の無いところに "political equality" も "equality before the laws" も存在しないと述べている。また完全な平等とは、"equal consideration, the absence of any and all man-made distinctions between men" と定義づけている (67)。博愛について論じている "Who Are Our Brethren?" では、"Liberty is of no value in itself, but is valuable only as a means to equality; and equality that did not eventuate in fraternity would perish" と、「自由、平等、博愛」の不可分性を強調している (933)。また、"After all, we are our brother's keepers, though a Cainic society has been denying it ever since the first murder. We are put into one another's custody in this world; here, where so many things are in doubt, this is unquestionable" と指摘し、兄弟愛、同胞愛、人類愛、博愛へ

と愛の輪を広げていく道筋を示している (935)。『アルトルーリア物語』の Homos も "We do not conceive of the human race except as a family" と言い、人類全体を "a human family" と呼んでいる (69-70)。

## V

持ち船のヨットが Altruria の海岸で座礁したため、アメリカへ帰れなくなった Thrall 夫妻、その娘とイギリス貴族の夫 Lord Moors、召し使い達、及びヨットの乗組員達が、最初は拒みながらも、次第に Altrurianism の良さを認め、博愛精神に目覚めていくという変容振り (Altrurianization) を描くことにより、Howells は未来への社会改革の可能性を示唆している。Altruria 漂着当初、漂着者達は、食料などは金で簡単に買えるものと高を括っていたが、仕事が Altruria の唯一の「通貨」であると知って途方にくれる (423)。アメリカの友人 Dorothea に宛てた Eveleth の手紙の中に、このことが明瞭に書かれている：“. . . in Altruria you cannot buy anything except by *working*, and that work is the current coin of the republic: you pay for everything by drops of sweat, and off your own brow, not somebody else's brow” (406)。しかし、住み慣れてみると、美しい自然に恵まれた平和な Altruria のすばらしさが分かって、漂着者達は、ここに永住したいと思うようになる。召使達もこれまでのように、金のためにではなく、純粋な愛から主人一家に奉仕したいという気持ちに変わって行くのである。Altrurianism に「改宗」し、すべての責任といわば「煩惱」から解放された Thrall は、Homos 夫人に、“I have never been so happy since the first days of my boyhood” と現在の心境を語るが、一つ心残りなのは、自分の富の蓄積の犠牲となった人々への償いのことであると告白する。Homos 夫人に、アメリカに残して来た莫大な財産をどう処分するのかと聞かれて、Thrall は次のように答える。

. . . I ought to go into the records of my prosperity and ascertain just how and when I made my money. Then I ought to seek out as fully as possible the workmen who helped me

make it by their labor. Their wages, which were always the highest, were never a fair share, though I forced myself to think differently, and it should be my duty to inquire for them and pay them each a fair share, or, if they are dead, then their children or their next of kin. But even when I had done this I should not be sure that I had not done them more harm than good. (437-38)

Thrall の最後の言葉は、たとえ罪滅ぼしの埋め合わせをしても、諸悪の根源と見なされる金を支払うことは、本質的に間違っていると言われている資本主義体制の終焉に貢献することにはならないことを気にしてのものであるが、現時点における改革へ向けての最善の一步と言えよう。Howells にとって何よりも重要なことは、Thrall の心に正義心と博愛精神が芽生えたことである。第三編の結末で、Homos 夫人は、その題名に用いられた聖書の一節に言及し、「金持ちが神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通るほうがもっとやさしい」という趣旨の作者のメッセージを明らかにしている。Howells のメッセージの中には、産業資本主義の行き過ぎの是正と、アメリカ建国の理念への原点復帰の要求が含まれていることが理解できる。Homos に嫁いだ娘 Eveleth と共に Altruria に来て滞在している Mrs. Gray は、Altruria は自分の少女時代の世界にそっくりだと思い、ニューヨークの「人工的な生活」("artificial life") から Altruria の「簡素な生活」("simple life") に戻れたことを子供のように喜んでいる、と娘が友人に報告するように、Altruria は、古き良き日のアメリカへの郷愁を満足させてくれる国なのである (366)。

## VI

結論として言えることは、Howells の『アルトルーリア物語』は、アメリカの建国理念からの逸脱を指摘すると同時に、「古きよき時代」への原点復帰を含むアメリカ民主主義の進むべき方向を示すものであると言えよう。それはまた、社会正義の実現に向けて、アメリカが指針とすべき "blueprint" を示したものである (Kirk xxi, xxxiv)。

最後に、Howells のユートピア思想を解明する上で参考になると思われる著作として、ジャック・アタリの『反グローバリズム—新しいユートピアとしての博愛』に言及したい。アタリは、ユートピア思想を重要概念に沿って「不滅、自由、平等、博愛」の4つに分類整理して、現代社会は、

不滅、自由、平等がそれぞれの矛盾に突き当たり、つまづいているところに辿り着いた。宗教は不滅を約束しようとして、自由を制約しようとしてしまう。自由があるところでは、不平等や不確実性の進行に歯止めをかけることができないでいる。逆に、平等は自由が崩壊するところでしかその輪郭が見えてこない。いずれのユートピア概念も、自分の掲げる目標を達成するには至っていない、

と述べている (74-75)。最初の3つのユートピア思想の行き詰まりを打開するために、他人の幸せを自分の幸せと見なす博愛、すなわち個人の幸せを他人の幸せに関連づける唯一の愛他主義のユートピア思想、の必要性が生まれてきていると述べている (75-76)。アタリが提示している思想または行動原理は、すでに Howells が『アルトルーリア物語』で提示しているものであり、このことは Howells 文学の現代性、有用性、そして有効性の証明である。

(本稿は、2001年10月28日に開催された日本英文学会第54回九州支部大会シンポジウム第二部門「アメリカ文学と社会正義」で講師として口頭発表した原稿に加筆したものである。)

引証資料リスト

- アタリ、ジャック 『反グローバリズム—新しいユートピアとしての博愛』  
近藤健彦、瀬藤澄彦訳 東京：彩流社、2001。
- Cady, Edwin H. *The Realist at War: The Mature Years 1885-1920 of William Dean Howells*. Syracuse: Syracuse UP, 1958.
- Howells, William Dean. *The Altrurian Romances*. Ed. Clara and Rudolf Kirk. Bloomington: Indiana UP, 1968.
- . "Equality as the Basis of Good Society." *Century* 51 (1895): 63-67.
- . "The Nature of Liberty." *Forum* 20 (1895): 401-9.
- . *Selected Letters*. Volume 4: 1892-1901. Ed. Thomas Wortham, Christoph K. Lohmann, and David J. Nordloh. Boston: Twayne, 1981.
- . "Who Are Our Brethren?" *Century* 51 (1896): 932-36.
- 川又良也編 『総合研究アメリカ④平等と正義』 東京：研究社出版、1977。
- Kirk, Clara and Rudolf. Introduction. *The Altrurian Romances*. By W. D. Howells. Bloomington: Indiana UP, 1968. xi-xxxiv.
- 『広辞苑』 第5版 1998。
- Mielke, Robert. "*The Riddle of the Painful Earth*" : *Suffering and Society in W. D. Howells' Major Writings of the Early 1890s*. Kirksville, MO: Thomas Jefferson UP, 1994.
- Taylor, Walter Fuller. *The Economic Novel in America*. 1942. New York: Octagon Books, 1964.
- Webster's Third New International Dictionary of the English Language*. 1961.

## Abstract

### William Dean Howells's Cry for Social Justice in *The Altrurian Romances*

Kenji Akamine

*The Altrurian Romances* (1968) of William Dean Howells consists of three utopias: *A Traveller from Altruria* (1894), "The Letters of an Altrurian Traveller" (1893-94), and *Through the Eye of the Needle* (1907). The Altrurian traveller, Aristides Homos, visits the United States in 1892 and stays there for about a year and a half, visiting a New Hampshire mountain resort hotel, New York City and Chicago. These romances record Homos's criticisms of the social, political, and economic conditions of the industrial, capitalistic and "plutocratic" America. The Commonwealth of Altruria has attained the Utopian dream of brotherly equality through literal applications of the principles of "liberty, equality, and fraternity." Howells uses Homos as his spokesman in such a way that Homos's account of his country implies every insulting criticism of America. By letting the Altrurian Homos and his American wife describe the conditions of Altruria where complete social, political, and economic equality has been attained, Howells effectively draws the people's attention to his call for social justice through return to the ideals of the Declaration of Independence and the Constitution, especially through the strict observance of the principles of "liberty, equality, and fraternity."